

小さな親切というお土産

先頃、大分県に住む男性からうれしいお便りをいただきました。手紙の内容は、次のようなものです。男性がご夫婦で高松を訪れた時、商店街で夕食をとった後別行動をして帰る折に、ホテルまでの道が分からなくなり困ったそうです。コンビニで聞いても店員が要領を得なかったところへ、たまたま近くにいた中年の女性が親切に声をかけてくれて道を教えてくれた上に、心配だからと後から車で追いかけて、ホテルまで送り届けてくれたそうです。それをホテルに帰ってから奥様に話をすると、奥様も同様に道に迷ってしまい困っていたら、中学生数人が一緒にホテルまで歩いて行きましようと言って送ってもらったとのこと。ご夫婦そろって同時に高松市民から親切を受けたことに大いに感激をされたようです。手紙には、「この名もなき市民の行為が他に勝るものがないくらい貴重な土産となりました」とも書いてありました。

このような行為を本当の意味での「小さな親切」と言うのでしょうか。親切行為は、誰かの喜びや快適さにつながり、行うべきだと分かっている、実際その場面に遭遇するとなかなか実行に移せないものです。

旅先での親切という意味では四国には、八十八ヶ所巡礼のお遍路さんに無料で食物、衣料、宿泊などをサービスする「お接待」の風習があります。ただ、最近では、都市化や地域社会の絆の希薄化などの影響か、「お接待」そのものを見かけることも減っています。そして、そのような独特のおもてなしの心も希薄になっている気がしていました。でも、この女性や中学生の親切は、市民の間にまだまだ「お接待」の心が息づいている、という事を再認識させてくれました。手紙を読み、私の心まですっきりと洗われたような気持ちになりました。

「情けは人のためならず」ということわざも有ります。人に情けをかける（親切にする）ことは、回り回って自分に良い報いが来る、という意味です。「お接待」もそれが弘法大師の間接的な供養になり、自身の功德善根を積むことにつながるということが意識されて盛んに行われるようになった、とも言われています。

多くの市民が自分のためにもなる小さな親切を自然に行っている。そんな、人に優しい人がたくさんいるまちこそが良いまちなのだ、と確信しています。